

材木を担ぎながら 其の四 —プラモデル熱中時代—

きよ ほうへん
清 方扁

もてない男4人集まれば、いそいそと雀荘へ。時は昭和元禄、本人は「高等遊民」気取って、卒業後もブラブラしながらプラモデル作っているんだから、親もよく堪忍袋の緒を切らなかったものです。そのつけがその分、今でも材木担いで金策に右往左往して、全く世の中、上手く出来ているもんです。

さて、本題の軍艦プラモデルですが、1971年縮尺1/700スケールの軍艦シリーズが発売、一番大きい戦艦大和でも全長35cm位でコレクションには最適、発売10年はブームに乗って猛烈な数の艦艇が発表されました。

軍艦の人気はその艦の活躍の度合い、艦の姿、知名度などがあるとおもいます。一番人気の艦大和は建造費が今の金額で3兆円のエリート艦でしたが実戦には全く活躍できませんでした。しかしその大きさは戦時中病院船として活躍し、現在横浜の山下公園で係留公開されている氷川丸と比較してみると良く分かるでしょう。



手前「大和」と「氷川丸」の大きさの比較

それに反して戦艦「扶桑」や「山城」は開戦時、既に建造から30年も経ち速度が遅く足手まといの老朽艦、その30年の間に様々に改造され見事に奇妙な艦影になってしまいました。でも老いてなお材木を担ぎ続ける我が身と比べてしまい何か愛着を感じるものがあります。

艦名の付け方は、戦艦は「伊勢」とか「日向」といった国名を、巡洋艦は「妙高」とか「筑摩」といった山や川の名前を、航空母艦は飛龍、翔鶴といった優雅な飛翔体の名前を、駆逐艦は「秋月」「春雨」といった日本の四季や「松」「杉」などの木や花の名前が付けられました。また小艦艇のなかには戦前日本の領土だった占守、択捉、国後といった北方領土の名前や、台湾の「高雄」(巡洋艦)という名称もあります。また駆逐艦には「霞」「鳶」「堇」「薄」「蓼」といったあまり強そうでない艦名もありました。



老朽戦艦「扶桑」

(写真のこのプラモデルは不出来で恥ずかしい)

まだまだ書きたい思いは尽きませんが、終わりにこれも有名な言葉ですが、連合艦隊司令長官山本五十六の言葉を紹介します。社会人として部下、後輩を育てる者としての心構えを良く表した言葉だと思えます。

やってみせ、言って聞かせて、
させてみせ、ほめてやらねば
人は動かず。
話し合い、耳を傾け、承認し、
任せてやらねば、
人は育たず。
やっている、姿を感謝で
見守って、信頼せねば、
人は実らず。

今回も自己中な駄文をお読みいただきありがとうございました。